

令和4年度 園評価書

園番号 14 園名 服織中央こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
「丈夫な身体と豊かな心の子」 ・夢中になって遊ぶ子 ・こころ豊かな子 ・元気な子	わくわくがいっぱい！！ ～どうして？ どうなる？ やってみよう！ ～	安心して自分の思いを言葉や姿で表現し、やりたい遊びを見つけて楽しむ	保育者が子どもの思いを肯定的に受け止め、思いに寄り添いながら一緒に遊びを進めることで、安心して自分なりの思いを言葉で表現し、イメージを膨らめながらやりたい遊びを広げ楽しむ姿が見られた	A	A	・昨年までの取り組みの成果をふまえて、本年度特に研修を中心に、一人一人の“もっとやりたい”を膨らめる援助の工夫をこらして、教職員の方々が保育・教育活動にあたっているのが見えてきている。園としてやろうとしていることが、実際に先生方他に共有され、実践されているということが素晴らしいことだと思う ・思い思いの遊びに夢中になっている子どもたちの様子を見ると、先生方の取り組みは子どもたちに浸透していると感じる	・一人一人の遊びが深まり、「明日もやりたい」「もっとやりたい」と遊びが繰り返されていくよう、積み重ねを意識した環境を構成していく ・子どもが気付きや発見を周りの友達に伝え、面白さを共有することができるよう、子ども同士のつながりを意識した言葉かけの工夫をしていく
		わくわくしながら好きな遊びを楽しみ、友達と楽しい思いを共有していく	子どもが楽しんでいる姿を受け止め、保育者と一緒に遊びを楽しんでいったことで、子どもの「楽しい」という経験がわくわくにつながっていった。また、気の合う友達と一緒にアイデアを出し合い、遊びを作り上げていく過程を共有、共感しながら、遊びを楽しむ姿も見られた	A	A		
		様々なものやことに関心をもち、気付きや発見、なぜ?を感じながら、好奇心を広げていく	子どもが様々なことに興味関心をもち、気付きを言葉にしたり、周りにいる友達と共有したりしながら、楽しむ姿が見られた。また、子どもの気付きや発見に対して、保育者が「なんだろうね」と一緒に考えたり、共有したりする声掛けをしていくことで、好奇心を広げ、遊びを楽しむ姿が見られた	A	A		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもの発達、育ちを共通理解し、一人一人に応じた教育・保育を行う	クラス関係なく、園全体で同じ関わり、援助ができるよう、子どもの姿や気付きを話したり、相談し合ったりすることで、情報を共有し、一人一人に応じた教育・保育を行うことができた	B	B	・一人一人の違いや発達に合わせて、柔軟な見方で子どもを見て、きめこまやかな対応をされていることも、それぞれの子どものパフォーマンスを上げることにつながっている。「積み上げ」のない子に、確かな力は身に付いていかなないので、その部分をプロの目で見取り、適切な手立てを打っていくことは、小学校においても大切にしなければならぬ点だと考えている ・いつ来ても、明るく温かな園の雰囲気、教職員の方々の笑顔、子どもたちへの柔らかなまなざし、それによって引き出される子どもたちのやる気・元気・そういったものが一体となって、保護者からも厚い信頼を得ながら園の運営をされていると感じる ・色々な玩具や工作道具が用意されているので、「夢中になって遊ぶ」ことを見つけやすい環境だと思う	一人一人の発達や育ちを把握し、職員間で共有しながら、6年間の育ちを意識した保育者の援助の仕方について考え、実践していく 引き続き保護者との連携を大切にし、朝の受け入れを丁寧に行いながら、家庭的な雰囲気の中で保育していく 一人一人の子どもが、探究心をもって、もの、こと、ひとに関わり、遊びを深めたり、友達と面白さや楽しさを共有したりしていくことができるよう、環境を整えていく 子どもが安心してやりたい遊びを楽しむことができるよう、意識して環境の見直し、点検を行っていく。また、事故を防止するため、保育者間で声を掛け合い、みんなで子どもを見合う体制を強化していく 調理員と相談しながら、子どもの食に対する現状、課題を検討し年間計画を作成。毎月、「楽しく食えること」の大切さを伝えながら、食育活度を行っていく
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	子どもが安心して園生活を送れるよう、連絡ノートを活用したり、送迎時や参加会などを通して、園児一人一人の健康状態や生活リズム、家での様子を把握したりすることで、家庭とのつながりを大切にしながら保育することができた	A	A		
		(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもが何を楽しんでいるのかを見取り、遊び出しの環境を構成していくことで、子どもがすぐに遊び出し、思いを膨らめ、わくわくを感じながら、遊びを広げることができた	B	A		
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	ヒヤリハット記録を出し合い、全職員で共有しながら、安全に対する意識を高めていく。また、身近で起こりうる怪我に対しては子どもと一緒に考えていく機会を作る	ヒヤリハット記録を見やすい場所に掲示することで、タイムリーに情報共有できた。また、ヒヤリハット記録の活用の仕方を職員間で話し合ったことで、記録を書くことの意味につながっていった。また、怪我に関して子どもたちと一緒に考えていく機会を設けることで、怪我に対する意識が変化していった	B	B	・生活リズムの多様性への配慮は、申し出れば配慮してくださる雰囲気なので、安心できる。参加会以外で、先生方と園での様子を話せる時間があると、より安心できる ・特別支援教育に関しては、小学校中学年くらいから始まる二次的な問題を回避する上で、早期対応が賢明。園の先生方が経験から直感的に感じる子どもの違和感・気になることは、その後、その心配が的中するケースも少なくない。「早く気付いて適切なケアを」は、基本的には得策と考えているので、今後も園・小学校において支援特別教育に関する情報交換を積極的にさせていただきたい ・保護者アンケートの回収率は、多少よくなってきたと思われる。小学校になれば宿題や期限のある提出物など、子どもにとっても保護者にとっても計画性が必要な場面が増えていくので、すべきことは最後まで見届けることも大事 ・長引くコロナ禍で外部との交流が活発にはできず、近隣の学校や地域との連携が取れていないかのように見えるが、自治会連合会防災会議への積極的参加や小学校の先生を招いての公開保育等、厳しい状況の中、努力されていると感じる ・真夏以外は、もう少し園外へ出掛ける機会を設けてほしい。今のみずみずしい感性で感じ取れることは、今だけの宝なので友達と手を繋いで歩く街並みや空気感を味わえたら嬉しい。また、親や先生以外の大人と関わる経験、園以外のお姉さんやお兄さんと話す場も来年度以降はもてるとよい	
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	食育活動や食育だよりを通して、早寝早起き、朝食の大切さを子どもや保護者に伝え、基本的な生活習慣の自立を促していく	苦手な食材がある子どもに対して、調理員と協力しながら、野菜クッキングをしたり、調理の仕方を工夫したりしていくことで、野菜に興味をもち、食べてみようとする姿が多く見られた。また、その様子を食育だよりとして発行することで、保護者に食の大切さを伝えていくことができた	B	B		
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	園児の姿について情報交換を密にしたり、応用行動分析や支援方法を学んだりする中で、特性の理解を深め、支援の幅を広げていく	ケース会議の中で、園児の様子を伝え合い情報交換することで、全職員で支援方法を考え、実践することができた。また、ストラテジー使った応用行動分析をしていくことで、支援の幅が広がり、一人一人に寄り添った支援方法について考えることができた	B	B		
5 組織運営	(1)組織体制の充実	全職員が自ら園務分掌に責任をもち、協力しながら運営を進める	各分掌で役割を分担し、一人一人が責任をもって企画、準備を進めていくことができた。余裕をもって、早い段階で計画し、協力体制を作っていく	B	A	子どもが夢中になって遊び、遊びが深まるよう、素材の提供の仕方やタイミングを考えて環境を構成していく 子どもの探究する姿を捉え、子どもの育ちや保育者のねらいを踏まえておたよりやドキュメンテーションを作成。写真を見える化していく 計画的に小学校へ散歩したり学校探検に出掛けたりし、交流をもつ機会を積み重ねていく 園外保育の年間計画を作成し、積極的に園外に出て地域の方と関わる機会を設けていく	
6 研修	(1)研修体制の充実	子どものやりたい思いを読み取り、育みたい資質・能力に照らし合わせながら、子どもの育ちや保育者の援助について分析をしていく	公開保育の事後研修やドキュメンテーションを活用した話し合いを通して、育みたい資質・能力に照らし合わせたり、子どもの姿を多面的、多角的に捉えていったりすることで、一人一人に必要な援助や関わり、“もっと”につながる環境について分析していくことができた	A	A		
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	各プロジェクトで園の環境を見直し、園児一人一人の“もっとやりたい”が膨らむような環境を構成していく	全職員が各プロジェクトにおいて、環境を見直し、子どもの興味関心に合わせて環境を見直し、改善していくことで、子どもの遊びが広がってきている。プロジェクトの進捗状況を文書や写真で掲示することで、活動内容が見える化され、共有することができた	B	A		
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	子どもの“もっとやりたい”姿を捉え、おたよりやドキュメンテーションを作成、掲示しながら、子どもの育ち、探求する姿を保護者に伝えていく	毎日のおたよりボードやドキュメンテーション、おたよりにおいて、具体的な場面や子どもの表情を通して、保育のねらいや子どもの育ち、思いを保護者に伝えることができた	B	B		
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の学校との連携の推進	地域の小学校が身近に感じられるよう、小学校に散歩や学校探検に出掛け、交流をもつ機会を重ねていく	コロナ禍において、子ども同士の交流はできなかったが、公開保育や公開授業、事後研修にお互いの職員が参加し、情報共有することはできた。幼・小の接続の大切さを再確認することができたため、来年度につなげていきたい	B	B		
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	計画的に園外保育に出掛け、季節を通して自然の変化を感じ取ったり、羽鳥地区の良さを知る機会を設けたりしていく	保護者からの声掛けで、お茶摘みやじゃがいもの収穫に参加し、貴重な体験ができた。また、外部講師を活用して、年2回環境学習を実施したことで、羽鳥地区の川で生き物と関わったり、秋の自然物を使って遊ぶ楽しさを味わうことができた	B	B		